

親に言われなくても勉強する子

——「自律学習」の効用と規定要因——

岡部 悟志 (Benesse 教育研究開発センター研究員)

◆ 要約

- ◎意識レベルの学習意欲と見なせる「勉強積極性」、行動レベルの学習意欲と見なせる「平日家庭学習時間」はいずれも子どもの出身階層に規定されるが、それらを親が言わなくてもできる（自律学習ができる）かどうかは、出身階層に左右されないし子ども本人の過去の学業成績とも関連しない。
- ◎学習意欲が同水準だったとしても、自律学習ができる子はそうでない子と比べて現在の学業成績が高い。その背景には、勉強に対する積極性や学習時間の水準に還元されない、学びに対する志向性の差があると考えられる。
- ◎そのような観点から自律学習の規定要因を探ったところ、理解動機に基づく学習（わかること自体おもしろいから勉強する）や、拡張的能力観を背景とする学習目標（その場でできることをコツコツやっていきたい）などが自律学習を促進する。
- ◎中学入学前までに親が「しっかり勉強するように言っていた」ことは意識レベル・行動レベルの自律学習を減退させること、「子どものやりたいことを尊重し援助・応援」は意識レベルの自律学習を促進させる効果があることから、子ども自身が自律性を発揮できるような機会を生み出す中学入学前までの子育ての積み重ねが、中学以降の自律学習へとつながる可能性がある。

1 問題関心

みずから課題に取り組み、試行錯誤を経て解を導き、結果を受けて軌道修正する一連の行動様式を獲得することは、子どもが大人になる過程の中で、実社会から要請される重要なタスクの1つである。とりわけ、子どもから大人への移行期にあたる青年期半ばにさしかかった中学生とその保護者にとって、学校生活や卒業後の進路選択などの比較的時期の迫った課題の範囲を超えて、彼／彼女らの活動のフィールドが高校や大学生生活、職場生活

や新たな家族形成へと広がっていくことを見据えたときに、ますます重要性を帯びてくる観点といえる。このような問題関心に基づき、本稿では、中学生とその保護者を対象とした調査から得られた親子ペア・データ（母親が回答した2,198サンプル）を用いて、自律的な学習スタイルを獲得していることの条件の1つと考えられる「親に言われなくても勉強する子」を「自律学習ができる子」として定義・抽出¹⁾し、その特徴を明らかにしていく。

2 先行研究の検討

教育社会学では、子どもの学習意欲の水準は出身階層に規定されることが指摘されてきた(例えば、菊谷2000, 2003)。すなわち、親の階層が高いほど、子どもは学校での勉強に積極的であり、家庭での学習時間も長い。ただしこれらの研究では、子どもの学習意欲が、自律的なものなのか否かを積極的に区別していない。子どもの意識レベルの学習意欲(勉強積極性)も、行動レベルの学習意欲(平日家庭学習時間)も、子ども本人の主体性に基づく指標であることを前提としたうえで、結局結論としては、出身階層に規定されていることを暴露するという論法に従っているためと思われる。本稿では、たとえ子どもの学習意欲が同水準だったとしても、親に言われて勉強する場合と、親に言われなくても勉強する場合があり、それらを意識的に区別する²⁾。その理由は、第1に、出身階層と自律学習の関係は、出身階層と学習意欲の関係とは異なるのではないかと、という仮説を検証するためであり、第2に、学習意欲が自律的なものか否かによって本人の学業達成に差がつくのではないかと、という仮説を検証するためである。

以上のような仮説を導いた背景には、次の先行研究によって指摘された子どもの自律的な学習のあり方と学業達成の関連に関する知見がある。第1は、お茶の水女子大学研究グループが2009年に全国学力・学習状況調査専門家会議で報告した『家庭背景と子どもの学力等の関係』である。そこでは親の子に対する様々な接し方が子どもの学力に影響していることが明らかにされている。そのなかで興味深いのは、子どもの学力を目的変数、親の子に対する接し方〔親の回答〕を説明変数とする重回帰分析において、世帯年収を投入したときの各説明変数の β の変化である。説明変数の多くは、世帯年収の投入によって β の絶対値が小さくなる(すなわち、多くの説明変数は世帯年収の代理的な変数と見なせる変数であった)が、「親が言わなくても子ども

は自分から勉強する」という項目については、 β の絶対値が小さくならない。この分析結果を受けて同報告は、「『親が言わなくても子どもは自分から勉強する』家庭では子どもの学力は高いのである。これは、『親が言わなくても子どもは自分から勉強する』ようになるまで勉強の習慣を強化することの重要性を示唆している」と結論づけている。

第2は、中学生の成績の規定要因分析を行った研究の知見である(木村・岡部ほか 2009)。それによれば、成績に対して、家庭での学習時間や出身階層(親学歴)とともに、自律学習(「人に言われなくても自分から勉強する」〔子の回答〕)がポジティブな効果を持つ。さらに説明変数どうしの関係をパス解析を用いて調べてみると、家庭での学習時間は出身階層と強く結びつくが、自律学習と出身階層の結びつきは比較的緩やかなものであった。

以上に挙げた先行研究では、①自律学習は出身階層とはやや独立に存在する学習態度であること、②自律学習は子どもの学業達成にポジティブな影響を与えていることの2点が共通する。ただし、前者の研究では親の子に対する評価に基づいて、一方の後者の研究では子どもの本人の評価に基づいて「自律学習ができる子」を抽出しているという、それぞれの調査データの特性上の限界がある。

では、自律学習ができる子はどんな要因に規定されているのか。(教育)社会学や心理学の議論を踏まえて、以下に挙げた3つの考え方に着目する。第1は、親の養育スタイルによる影響である。社会階層・階級研究では、親の社会階層が子どもの教育達成・社会的地位達成に影響を与える媒介要因として、親の養育スタイルに着目してきた。わが国における小学生時代の親の養育スタイルと子どもの教育達成・社会達成の関連を分析した本田(2008)によれば、小学生時代に親から受けた学習や生活習慣を厳格に求める子育て(「きっちり」とした子育て)が、中3時の学業成績を有意に向上させ、その後の最終学歴や社会達成を左右することが示されている。そこ

では自律的な学習か否かの区別は関心の対象ではないが、少なくとも、子どもの将来を左右するとされる中学時の学業成績が、それまでに親から受けた「きっちり」とした子育ての上に成り立っているとされている。

第2は、子ども自身の勉強する理由づけ(学習動機)の影響である。学習意欲の水準は同じであっても、人によって勉強する理由は様々であり、それによって学習に対する意識や行動が異なると考えられる。市川(2001)は、「学習の功利性」と「学習内容の重要性」という2軸から学習動機の次元化を行っている。前者の功利性の軸では、例えば「学習自体が楽しい」という充実志向、「仕事や生活に生かす」という実用志向を両端とした学習動機の類型化が示されているが、例えば、このような枠組みに基づいて自律学習の規定要因を探ることも可能となる。

第3は、子どもの達成目標とその背後にある能力観の影響である。Dweck(2008=2007)によれば、自分の能力を固定的で変わらない(固定的能力観。fixed mindset)と信じている人は自分の能力を繰り返し証明するために成功することを目標とする一方で、人間の基本的な資質は努力次第で伸ばすことができるという信念(拡張的能力観。growth mindset)をもっている人は成長することを目標とし努力を継続する。「達成目標理論」(櫻井 2009: 119)に従えば、前者は「遂行目標」(performance goal)、後者は「学習目標」(learning goal)とされる。これらが、子どもの自律的な学習態度に反映されることが考えられる。

3 仮説の設定

先行研究のレビューを踏まえ、以下の仮説を検証する。なお、変数の設定については、次節を参照されたい。

- 理論仮説1：出身階層が高い子ほど、学習意欲が高い。
- 作業仮説1-1：経済階層が高い子ほど、

勉強積極性が高い。

- 作業仮説1-2：経済階層が高い子ほど、平日家庭学習時間が長い。

理論仮説1は、「子どもの生まれ育った家庭背景要因が学習意欲を規定する」という先行研究から得られた知見を、本調査データを用いて再検証するためのものである。その上で本稿では、たとえば子どもの学習意欲が同水準だったとしても、親に言われて勉強する場合と親に言われなくても勉強する場合があることに着目し、それらの規定要因やもたらす効果を明らかにすることを目標として理論仮説2~4を設定した。本稿の関心は、学習意欲の水準に還元されない自律学習の背景要因等を探ることにある。以下では、意識レベル・行動レベルの学習意欲が一定程度あることが認められる層に限った場合の仮説を示す。

- 理論仮説2：意識レベル・行動レベルの学習意欲が一定水準あれば、子どもの出身階層や過去の学業成績は、自律学習ができるか否かに影響しない。
- 作業仮説2-1：経済階層の高低、また過去(小5時)の学業成績によらず、勉強積極的な子どもの中に親が言わなくても積極的な層が一定比率存在する。
- 作業仮説2-2：経済階層の高低、また過去(小5時)の学業成績によらず、平日家庭学習時間がふつう以上の子どもの中に親が言わなくても勉強する層が一定比率存在する。

- 理論仮説3：意識レベル・行動レベルの学習意欲が同水準だったとしても、自律学習ができる子はそうでない子よりも学業成績が高い。
- 作業仮説3-1：親が言わなくても勉強積極的な子どもは、親が言って勉強積極的な子どもよりも、現在(中2時)の学業成績が高い。
- 作業仮説3-2：親が言わなくても平日家

庭学習時間がふつうか長い子どもは、親が言って平日家庭学習時間がふつうか長い子どもよりも、現在（中2時）の学業成績が高い。

●**理論仮説4**：意識レベル・行動レベルの学習意欲が一定水準あれば、中学入学前までに親から学習に直結した明示的なしつけを受けた子どもほど、また理解動機に基づいて学習する子どもや拡張的能力観に基づく学習目標を内面化した子どもほど、自律学習ができる。

○**作業仮説4**：中学入学前までに親が「しっかり勉強するように言っていた」ほど、子どもが「勉強がわかること自体おもしろいから勉強する」、あるいは「これから先、その場その場でできることをコツコツやっていきたい」と考えているほど、自律学習が促進される。

4 変数の設定

①意識レベルの学習意欲（勉強積極性）

Q06A「学校での勉強に積極的に取り組んでいる」に対する回答を用いて、「とてもあてはまる」と「まああてはまる」の合計を「勉強積極的」、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」を「勉強消極的」とした。

②行動レベルの学習意欲（平日家庭学習時間）

Q25「塾や家庭教師の利用と1週間あたりの利用時間」に対する回答から、1日あたりの塾の時間を算出し、Q26A「平日1日あたりの勉強時間」と合算した。これを全体に占める比率が3等分になるように「長い」「ふつう」「短い」の3つのグループに分けた。

③意識レベル・行動レベルの自律学習

HQ16A「子どもに『もっとがんばりなさい』と言う」に対する回答に着目し、「よくある」と「ときどきある」の合計を「親が言う」（親の関与が強く子どもが自律的でないことをあらわす）、「あまりない」と「まった

くない」の合計を「親が言わない」（親の関与が弱く子どもが自律的であることをあらわす）とする。本稿における自律学習の定義は、①と③をクロスさせることで抽出される「勉強積極的」かつ「親が言わない」（意識レベルの自律学習ができている）、②と③をクロスさせることで抽出される平日家庭学習時間が「長い」「ふつう」かつ「親が言わない」（行動レベルの自律学習ができている）とする。なお、いずれの分析においても、それぞれの比較の対象は、「勉強積極的」かつ「親が言う」（意識レベルの自律学習ができている）、平日家庭学習時間が「長い」「ふつう」かつ「親が言う」（行動レベルの自律学習ができている）とする。

④学業成績（小5時、中2時）

Q33「小学5年生のとき、あなたの成績はクラス内でどれくらいでしたか」、Q07B「あなたの成績は同じ学校にいる中学2年生の中でどれくらいだと思いますか」に対する回答を用いて、「下のほう」「やや下のほう」を「下位」、「中くらい」を「中位」、「やや上のほう」「上のほう」を「上位」とした。

⑤経済階層

Q30「あなたの家にあるもの」の点数を足し合わせたものから「所有財スコア」を算出し、その値をもとに全体に占める比率が3等分になるように「上位」「中位」「下位」の3つのグループに分けた。

⑥中学入学前までの親の養育スタイル

HQ15A「しっかり勉強するように言っていた」、HQ15D「子どものやりたいことを尊重し、援助や応援をしていた」に対する回答を用いて、「とてもあてはまる」：4点～「まったくあてはまらない」：1点と得点化した。前者は、親から子への学習に対する明示的な働きかけを、後者は子どもの主体性を尊重しバックアップする働きかけをあらわす。

⑦学習動機

Q06C「勉強がわかること自体おもしろいから勉強する」、Q06F「学校の授業内容は将来仕事をする上で必要だ」、Q06G「学校

の授業内容は高い学歴を得るために必要だ」に対する回答を用いて、「とてもあてはまる」：4点～「まったくあてはまらない」：1点と得点化した。それぞれ、得点が高いほど「理解動機に基づく学習」「実用動機に基づく学習」「達成動機に基づく学習」を実践していることをあらわす。

⑧達成目標とその背後にある能力観

Q42A「社会的な地位や名誉のある人間になりたい」、Q42D「これから先、その場でできることをコツコツやっていきたい」、Q42G「できるだけ高い学歴を身につけたい」

に対する回答を用いて、「とてもそう思う」：4点～「まったくそう思わない」：1点とした。Q42A、およびQ42Gは、得点が高いほど固定的能力観を背景とする遂行目標を内面化していること、Q42Dは、得点が高いほど拡張的能力観を背景とする学習目標を内面化していることをあらわす。

5 仮説の検証

表1・2は作業仮説1-1・1-2の検証結果である。表1より、経済階層が高いほど勉

表1 勉強積極性×経済階層

経済階層	勉強積極性		合計	Q06A×Q30
	積極的	消極的		N
上位 (%)	79.6	20.4	100.0	(671)
中位 (%)	75.0	25.0	100.0	(928)
下位 (%)	71.3	28.7	100.0	(567)

1%水準で有意 p=0.003

表2 平日家庭学習時間×経済階層

経済階層	平日家庭学習時間			合計	Q25・Q26A×Q30
	長い	ふつう	短い		N
上位 (%)	46.7	32.6	20.7	100.0	(662)
中位 (%)	34.1	32.9	32.9	100.0	(920)
下位 (%)	23.1	29.5	47.4	100.0	(559)

0.1%水準で有意 p=0.000

表3 意識レベルの自律学習×経済階層（勉強消極的層を除く）

経済階層	意識レベルの自律学習		合計	HQ16A×Q30
	できている	できていない		N
上位 (%)	26.2	73.8	100.0	(531)
中位 (%)	27.3	72.7	100.0	(692)
下位 (%)	26.6	73.4	100.0	(402)

有意差なし p=0.903

表4 意識レベルの自律学習×学業成績（小5時）（勉強消極的層を除く）

学業成績 (小5時)	意識レベルの自律学習		合計	N
	できている	できていない		
上位 (%)	27.6	72.4	100.0	(651)
中位 (%)	26.4	73.6	100.0	(717)
下位 (%)	27.8	72.2	100.0	(237)

HQ16A × Q33
有意差なし p=0.833

表5 行動レベルの自律学習×経済階層（平日家庭学習時間が短い層を除く）

経済階層	行動レベルの自律学習		合計	N
	できている	できていない		
上位 (%)	23.4	76.6	100.0	(521)
中位 (%)	26.4	73.6	100.0	(614)
下位 (%)	23.2	76.8	100.0	(293)

HQ16A × Q30
有意差なし p=0.417

表6 行動レベルの自律学習×学業成績（小5時）（平日家庭学習時間が短い層を除く）

学業成績 (小5時)	行動レベルの自律学習		合計	N
	できている	できていない		
上位 (%)	27.1	72.9	100.0	(549)
中位 (%)	23.6	76.4	100.0	(631)
下位 (%)	23.7	76.3	100.0	(228)

HQ16A × Q33
有意差なし p=0.333

強積極的な子どもが多いこと、表2より、経済階層が高いほど平日家庭学習時間が長いことがわかる。本調査データにおいても、先行研究によって導かれた知見と整合的な結果が得られたことから、仮説1は採択された³⁾。

以下の分析では、勉強消極的層、または平日家庭学習時間が短い層を除く。学習意欲が一定水準ある場合について、それが自律的なものか否かという点に関心があるためである。表3・4は作業仮説2-1、表5・6は作業仮説2-2の検証結果である。表3より、経済階層の高低によらず、意識レベルの自律

学習ができている層が一定比率存在する。また表4より、小5時の学業成績の高低によらず、意識レベルの自律学習ができている層の比率は一定であった。つまり、子どもの出身階層や過去の学業成績は意識レベルの自律学習を規定しない。さらに表5・6によれば、意識レベルの自律学習を行動レベルの自律学習に置き換えたとしても、同様の結果が導かれる。以上の分析から、経済階層や過去の学業成績は自律学習ができているか否かを規定しないことがわかる。

表7・8は、それぞれ作業仮説3-1・3-2

表7 学業成績(中2時)×意識レベルの自律学習(勉強消極的層を除く)

意識レベルの 自律学習	学業成績(中2時)			合計	N
	上位	中位	下位		
	できている(%)	26.5	49.7		
できていない(%)	18.6	48.9	32.5	100.0	(1180)

0.1%水準で有意 p=0.000

表8 学業成績(中2時)×行動レベルの自律学習(平日家庭学習時間が短い層を除く)

行動レベルの 自律学習	学業成績(中2時)			合計	N
	上位	中位	下位		
	できている(%)	28.7	45.3		
できていない(%)	18.4	47.6	34.0	100.0	(1064)

0.1%水準で有意 p=0.000

の検証結果である。表7より、意識レベルの自律学習ができている層は、できていない層よりも現在の学業成績が高い⁴⁾。同様に表8からは、行動レベルの自律学習についても同様の傾向がうかがえる。以上より、意識レベルか行動レベルかを問わず、親に言われなくても勉強する、すなわち自律学習ができる子のほうが、そうでない子に比べて学業成績が良好であることがわかる。なお、自律学習ができることの効用は、子ども本人の高い学業成績だけでない。詳細は省くが、自律学習ができる子を持つ親は、子どもの基本的な生活・学習習慣や子どもの将来に対する悩みが少ないこと、みずからの生活充実感も高い傾向があることなどが本調査データから導かれる。

最後に、仮説4を検証するために、子どもの性・経済階層・学業成績(小5時、中2時)を統制し実行したロジスティック回帰分析を行った(表9・10)。なお、統制変数の1つである学業成績(中2時)は、表7・8で示したように自律学習の目的変数と位置づけてきたが、自律学習の規定要因の1つとも考えられる⁴⁾。因果の向きを正確に判定することは、一時点における横断的データである本調

査データの性質上困難であるが、ここでは上述のような可能性も考慮し、他の変数が自律学習に与える純粋な影響を抽出するための統制変数という位置づけでいずれのモデルにも投入することにする。また、小5時の親の養育スタイルは、他の変数に時間的に先行するため段階的な投入を試みた。また、分析からは勉強消極的層、平日家庭学習時間が短い層を除く。これまでの分析と同様に、学習意欲が同水準の層のなかで自律学習の規定要因を探るためである。

まずモデルの適合度を見てみると、いずれも0.1%水準で有意であるが、意識レベルの自律学習・行動レベルの自律学習のいずれにおいても、親の養育スタイルを投入したモデル2の決定係数が高い。ここから、あらためて親のかかわり方が子どもの学習態度と強くリンクしていることがわかる。また、仮説2の検証で行ったクロス分析で示されたように、経済階層(所有財スコア)と学業成績(小5時)は、いずれのモデルでも有意でない。

より詳細に見ていくと、表9からは、意識レベルの自律学習の規定要因としては、「勉強がわかること自体がおもしろいから」とい

表9 意識レベルの自律学習の規定要因（ロジスティック回帰分析）（勉強消極的層を除く）

独立変数	モデル1		モデル2	
	回帰係数	オッズ比	回帰係数	オッズ比
統制変数				
女子タミー	0.416	1.516 **	0.462	1.587 ***
経済階層（所有財スコア）	-0.018	0.982	0.000	1.000
学業成績（小5時）	-0.106	0.899	-0.051	0.950
学業成績（中2時）	0.310	1.364 ***	0.307	1.359 ***
学習動機				
勉強がわかること自体おもしろいから	0.165	1.179 *	0.157	1.170 +
学校の授業内容は将来仕事をする上で必要	0.028	1.029	0.054	1.056
学校の授業内容は高い学歴を得るために必要	-0.190	0.827 *	-0.172	0.842 +
達成目標とその背後にある能力観				
社会的な地位や名誉のある人間になりたい	0.006	1.006	0.022	1.022
できるだけ高い学歴を身につけたい	-0.158	0.854 +	-0.107	0.898
その場その場でできることをコツコツやっていきたい	0.161	1.174 +	0.119	1.127
中学入学前までの親の養育スタイル				
しっかり勉強するように言っていた			-0.964	0.381 ***
子どものやりたいことを尊重し援助・応援していた			0.223	1.250 *
定数	-1.768	0.171 ***	-0.387	0.679
Nagelkerke 決定係数	0.049		0.196	
モデル適合度	p=0.000		p=0.000	
N	1559		1549	

注：+：p<0.10、*：p<0.05、**：p<0.01、***：p<0.001。

表10 行動レベルの自律学習の規定要因（ロジスティック回帰分析）（平日家庭学習時間が短い層を除く）

独立変数	モデル1		モデル2	
	回帰係数	オッズ比	回帰係数	オッズ比
統制変数				
女子タミー	0.209	1.233	0.232	1.261 +
経済階層（所有財スコア）	-0.036	0.965	-0.034	0.967
学業成績（小5時）	-0.029	0.971	0.009	1.009
学業成績（中2時）	0.315	1.370 ***	0.328	1.389 ***
学習動機				
勉強がわかること自体おもしろいから	0.141	1.151	0.132	1.141
学校の授業内容は将来仕事をする上で必要	-0.084	0.919	-0.038	0.962
学校の授業内容は高い学歴を得るために必要	-0.163	0.850 +	-0.150	0.860
達成目標とその背後にある能力観				
社会的な地位や名誉のある人間になりたい	-0.034	0.967	-0.027	0.974
できるだけ高い学歴を身につけたい	-0.080	0.923	-0.026	0.974
その場その場でできることをコツコツやっていきたい	0.226	1.254 *	0.220	1.246 *
中学入学前までの親の養育スタイル				
しっかり勉強するように言っていた			-0.939	0.391 ***
子どものやりたいことを尊重し援助・応援していた			0.137	1.147
定数	-1.918	0.147 ***	-0.313	0.731
Nagelkerke 決定係数	0.042		0.179	
モデル適合度	p=0.000		p=0.000	
N	1364		1357	

注：+：p<0.10、*：p<0.05、**：p<0.01、***：p<0.001。

う学習動機が正の効果を持つのに対し、「学校の授業内容は高い学歴を得るために必要」という学習動機は自律学習を減退させることが読み取れる。また、親が「しっかり勉強するように言っていた」は負の、「子どものやりたいことを尊重し援助・応援」は正の効果をもつ。表10からは、子どもが「その場でできることをコツコツやっていたい」という拡張的能力観に基づく学習目標を内面化していることが行動レベルの自律学習を促進すること、中学入学前までに「しっかり勉強するように言っていた」という親の養育スタイルが負の効果を持つことがわかる。

6 結論

本稿では、「親に言われなくても勉強する子」を「自律学習ができる子」として定義・抽出し、たとえ子どもの学習意欲が同水準だったとしても異なることが考えられる自律的な学習の効用と規定要因を探った。まず効用の側面としては、自律学習ができる子は学習意欲が同水準のその他の子どもと比べても有意に学業成績が高い。さらにその親は、子

どもの基本的な生活習慣や学習習慣、子どもの将来に関する悩みが少なく、みずからの生活充実度も高い傾向が確認された。一方の規定要因の側面としては、自律学習ができるかどうかは、学習意欲の水準が一定水準以上であれば、出身の経済階層や子どもの過去（小5時）の学業成績とも関連しないことが判明した。さらに、自律学習の規定要因をいくつかの仮説に基づいて探ったところ、子ども自身が「わかること自体がおもしろい」という理解動機に基づいて学習をしていることや、状況に応じてコツコツ努力することを重んじる拡張的能力観を背景とした学習目標を内面化していることなどが、自律学習を左右する要因として抽出された。また、中学入学までの親の養育スタイルに着目したところ、「しっかり勉強するように言っていた」は意識レベル・行動レベルの自律学習を減退させること、「子どものやりたいことを尊重し援助・応援」は意識レベルの自律学習を促進させる効果があることがわかった。子ども自身が自律性を発揮できるような機会を生み出す中学入学前までの子育ての積み重ねが、中学時代の自律学習へとつながる可能性が考えられる。

<注>

- 1) 本稿における自律学習の定義は「4.変数の設定」の③を参照されたい。なお、親が子どもに対して「もっとがんばれ」と言っているか否かと他の設問への回答の関係を調べてみると、「もっとがんばれ」と言わない親ほど「子どもの勉強を手伝う」比率、「子どもが学校で勉強している内容」や「子どものテストの点数」を確認する比率が低いこと、子どもの「学習習慣が身につけていない」といった悩みが少ないなどの傾向がある。したがって、日頃親が「もっとがんばれ」と言っているか否かで、子ども本人が学習に対して自律的か否かを判定しても差し支えない。
- 2) もっとも心理学では、前者を外発的な動機 (extrinsic motivation) に基づく学習、後者を内発的な動機 (intrinsic motivation) に基づく学習といったように、概念上明確な区別を行っている (市川 2001: 24)。
- 3) 勉強消極的層、または平日家庭学習時間が短い層を除いて学習意欲と経済階層の関係を探ったところ、意識レベルの学習意欲 (勉強積極性) については有意でないものの経済階層が高いほど「とてもあてはまる」比率が高く、行動レベルの学習意欲 (平日家庭学習時間) は変わらず有意だった。勉強消極的層や平日家庭学習時間が短い層を除いたとしても、子どもの経済階層が高ければ高いほど、子どもの学習意欲も高い傾向がある。
- 4) 学業成績 (中2時) を目的変数とする1つの根拠を以下に示す。学業成績 (中2時) を目的変数、性・経済階層 (所有財スコア) ・学業成績 (小5時) ・自律学習 (意識レベル、および行動レベル) ができているか否かを説明変数とした重回帰分析、自律学習 (意識レベル、および行動レベル) ができているか否かを目的変数、性・経済階層 (所有財スコア) ・学業成績 (小5時、中2時) を説明変数としたロジスティック回帰分析を行ったところ、前者の決定係数 (調整済み R^2) は0.196~0.222だったのに対し、後者の決定係数 (Nagelkerke R^2) は0.027~0.033だった。これより、学業成績 (中2時) ←自律学習とするモデルのほうが、自律学習←学業成績 (中2時) とするモデルよりもあてはまりがよい。したがって、学業成績 (中2時) を目的変数とするのが適切と考えられる。

<引用文献>

- Dweck, Carol S., 2007, *Mindset: The New Psychology of Success*, Ballantine Books. (=2008、今西康子・訳『「やればできる！」の研究——能力を開花させるマインドセットの力』草思社。)
- 本田由紀、2008、『「家庭教育」の隘路——子育てに強迫される母親たち』勁草書房。
- 市川伸一、2001、『学ぶ意欲の心理学』PHP新書。
- 苅谷剛彦、2000、「学習時間の研究——努力の不平等とメリトクラシー」『教育社会学研究』66:213-30。
- 、2003、「教育における階層格差は拡大しているか——社会的セーフティネットとしての公教育の政策課題」『日本の所得格差と社会階層』（樋口美雄・財務省財務総合政策研究所・編著）日本評論社。
- 木村治生・岡部悟志ほか、2009、「子どもの24時間の過ごし方と時間に関する意識——『放課後の生活時間調査』（2008年）の結果から」2009年度・第61回日本教育社会学会大会・早稲田大学（Ⅲ-10部会）報告資料。
- お茶の水女子大学研究グループ、2009、「家庭背景と子どもの学力等の関係」全国学力・学習状況調査専門家会議報告資料。
- 櫻井茂男、2009、「達成目標理論」『自ら学ぶ意欲の心理学——キャリア発達の視点を加えて』（櫻井茂男）有斐閣。